応用研究論文

秋田県能代市における「ごみナビ」によるイベント支援と防災

―「結果防災のまちづくり」をめざして―

渡辺 千明

秋田県立大学木材高度加工研究所准教授

三重県は今後 30 年以内の発生が懸念される南海トラフ大地震での被災が予想されており，被害が広範にわたる場合には，県外からのボランティア支援は難しいと考えられている．そのため，災害時に行動できる県内ボランティアの継続的な育成と質の向上を目指している．市民が参加しやすく，継続しやすいイベントという「楽しい非日常」の活動で経験を積み重ねようと，イベント会場で来場者にごみの分別を呼びかけ，ナビゲートする「ごみナビボランティア」が続けられてきた．ここで蓄積されたさまざまなノウハウは，2011 年の東日本大震災時には三重県あげての被災地支援につながっている．能代市では，市民へごみの分別を周知・啓蒙するためにこのボランティア活動を 2006 年より継続して行っている．市民有志が三重県へ行って実際にボランティア活動を体験し，その後，能代の実情に合わせながらさまざまな工夫と改善を重ねてきた．当初の目的であるイベント会場内の散乱ごみの減少や来場者の分別・リサイクルへの認識向上などその成果は明らかにでているが，災害時の対応へどのようにつなげていくかが今後の課題となっている．

キーワード：ごみナビボランティア，イベント支援，結果防災のまちづくり

地域特性を考慮した防災対策が安心・安全な社会を構築するためには不可欠である．2011 年の東日本大震災以降，全国各地で被害想定の見直しが進められてはいるが，首都直下や南海トラフ大地震のように発生確率が高く，その対策が急がれる地域を除けば基幹産業の衰退，過疎・少子高齢化問題等の進行が深刻な地方の中小都市や中山間地域においては，依然，防災対策よりも「地域をどうするか？」が最重要課題となっている．

1995 年の阪神淡路大震災の被災地である神戸市では，地域コミュニティーとその連携の重要性が再認識され，地域住民を中心とした一人暮らし高齢者の見守り運動や小学校を拠点とする文化・スポーツ活動，都市と農村部との交流，子育てサークルネットといった活動が復興過程において進められてきている（神戸市，2006）．これらは震災時に不足，あるいはあれば良かったと捉えられたもので，換言すれば，防災訓練の実施や非常用物資の備蓄といった従来の防災対策とは異なるが，より豊かな日常生活やより快適なくらしを実現するためのまちづくり活動と，その中で得られた多様な人のつながりが災害時には有用であると言える．こうした日常の取り組みを災害時の炊き出しやボランティア支援といった活動につないでいく仕組みの重要性も指摘されており（山口，2006），防災活動とは被災を想定した避難訓練や消火訓練といったものばかりでなく，平常時の活動から災害時の展開を意識しておくことが重要と言える．

筆者はこうした過去の災害からの知見をふまえ，防災が主目的ではなくとも，日常生活の質向上につながるまちづくり活動が結果的に災害時に役立つと考えている．これを「結果防災のまちづくり」とよ

責任著者連絡先：渡辺千明　〒016-0874 秋田県能代市海詠坂 11-1　秋田県立大学木材高度加工研究所．E-mail chiaki@iwt.akita-pu.ac.jp

んで，その意識を持った取り組みの重要性を講演等で繰り返し訴えてきた.

東日本大震災以降，地域住民が主体となったさまざまな取り組みが紹介・奨励されてきているが，本論ではそれ以前から先進事例や研究成果を取り入れ，地域活性化事業などを活用しながら取り組んでいる三重県と秋田県能代市の事例を紹介する.

取り組みの背景

能代市循環型社会形成市民懇談会

平成 17 年度に能代市が立ち上げた市民や学識者からなる能代市循環型社会形成市民懇談会（座長・国際教養大学　熊谷嘉隆准教授（当時））の委員であった筆者は，ごみの分別・リサイクルを市民に啓蒙する活動事例として，三重県のハローボランティア・ネットワークみえ（以下，ハボネット）が毎年，伊勢市の伊勢神宮奉納全国花火大会で行っている「ごみナビゲーションボランティア活動（以下，ごみナビ)」を紹介した. 阪神淡路大震災後に知り合った三重県の防災担当者にハボネットの取り組みを紹介され，実際に一ボランティアとしてごみナビに参加した経験から，これまでのボランティア活動とは異なる意義があると感じたからである.

ごみに関わるイベント会場のボランティアは，来場者が捨てた散乱するごみを拾い集めるのが一般的であるが，ここでは会場内に数箇所のエコステーションを設置し，ボランティアの案内（ナビゲーション）により当該自治体のルールに従った分別を来場者自身が行っており，多くの懇談会委員からもこの方法は能代市民へのごみ分別・リサイクルの啓蒙活動に有効そうだとの意見を得ることができた.

三重県におけるイベント支援ボランティア：ハローボランティア・ネットワークみえ

ハボネットの概要.

三重県の地域振興イベントで知り合ったボランティアたちが，イベント終了後の 1998 年 12 月にイベント支援ボランティア団体をたちあげた．高校生から高齢者まで約 500 人が登録メンバーとなっている. イベント主催者とのパートナーシップを築き，より気軽に市民がボランティアとして参加できる場をつくるべく支援をし，イベント会場でのノウハウを地域づくりに活かそうというのが活動目的である．その背後には市民が参加しやすく，継続しやすいイベントという災害とは正反対の「楽しい非日常」の活動でトレーニングすることによって，ボランティアセンター運営のノウハウや人間関係の蓄積を図っておき，災害が発生した時には臨機応変に対応し，主体的活動ができるボランティアを育てようという目的も存在する. 三重県は今後 30 年以内の発生が懸念される南海トラフ大地震での被災が予想されており，被害が広範に渡る場合には県外からのボランティア支援は難しいと考えられるため，このような県内ボランティアの継続的な育成と質向上を目指している.

ハボネットが毎年行っているイベント支援は，伊勢神宮奉納全国花火大会でのごみナビ（写真 1）や志摩市にて行われるマラソン大会でのボランティア活動となっている（ハローボランティア・ネットワークみえ，2014).

写真 1　花火大会におけるボランティアセンターのボランティア受付（左）とごみナビ(右).

災害時のハボネットの活動.

全国のどこかで災害が発生した場合には，津市のみえ県民交流センター内に官民が協働で被災者救援を行う「みえ災害ボランティア支援センター」が設置され（みえ災害ボランティアセンター，2014)，ホームページにボランティアの募集情報や現地情報，関係機関の活動状況等が掲載される．ハボネットはこの支援センターの中心的役割を担っており，東日本大震災時には「東日本大震災復興支援みえ宣言」により，三重大学や商工会議所等の参加も得て 2013 年 12 月まで岩手県山田町へ支援活動を行っている.

2004 年の台風 21 号災害時に支援センターの前身である「三重県ボランティア情報センター」が県内

被災者支援のため設置された際には，これまでの人的ネットワークや経験・日頃の活動成果を生かし，ハボネットメンバーや県内のボランティアコーディネーター，社会福祉協議会職員，県内外からの災害ボランティア団体等は資機材の提供のみならず，必要書類やセンター運営のノウハウを現地提供して活動の円滑化に大いに貢献している（渡辺・秦, 2005）．また，伊勢市の花火大会では各地からごみナビに参加するボランティアのために県内数箇所から発着するシャトルバスを運行し，会場到着までの車中ではごみナビのオリエンテーションや参加者のアイスブレイク等が行われている．この台風による被災地支援においてもボランティア用バスが運行され，花火大会のごみナビでのバス利用を応用した「ボランティアパック」が用意された．

被災地のボランティアセンターでは，何人のボランティアが来るのかは事前には把握できないため，ニーズとのマッチングが困難であったり，ボランティアセンターを運営する社会福祉協議会の通常業務とのバランス配分が難しいなどの課題があるが，ボランティアパックであれば，バス車中から携帯電話を使って到着前にニーズとのマッチングをすることで時間の節約やボランティアセンターの混乱を軽減することができる．被災地とボランティアにとってのメリットを表 1 に示す．このノウハウをまとめた冊子は東日本大震災以前に三重県から発行されていた（図 1）が，交通網の寸断，ガソリンや宿泊施設の不足が長期にわたって続いたこともあり，東日本大震災の被災地支援では官民問わず全国各地でボランティアバスが運行された．

図 1　災害ボランティアパック紹介パンフレット．

表 1　*ボランティアパックのメリット*

被災地	ボランティア
・まとまった人数を確保	・仲間作り・連帯感の創出
・予めボランティアの参加人数と到着時間が分かり活動準備と段取りが可能	
・ボランティア保険の加入，仕事の割り振りなど，活動前の時間短縮	・車内でボランティア保険の加入，仕事の割り振りなど活動前の準備が可能
・交通渋滞の緩和，当該地のガソリン消費の削減，駐車場不足の緩和	・往復の（安全な）交通手段の確保
・最小限のボランティアケア	・帰路の車内で活動後のクールダウン・反省会・情報交換，休息しながら安全に帰宅

能代市におけるイベント支援ボランティア：あきたごみナビ実行委員会

ごみナビの試行

能代市循環型社会形成市民懇談会ではハボネットのごみナビのほか，震災対応への意図も紹介したことから，能代市でも毎年花火大会が開催されていること，当時は秋田わか杉国体や全国植樹祭などボランティアが活躍する機会が県内で続くこと，能代市には日本海中部地震や米代川の水害等災害経験もあり，今後の被災も懸念されるなどから，ごみナビを実施してみたいとの声が数名の委員からあがった．しかしながら，三重県の活動に興味をもったものの具体的に活動がイメージできなかったため，主体となる自分たちがわからなければ実施できないと考え，2006 年 7 月に有志 4 人が伊勢市で実際にごみナビをしながら能代市での実施に向け調査を行った（ニューウェ～ブら，2006）．調査旅費は，秋田県のボランティア・市民活動支援助成金を得て賄った．調査内容と主な結果を表 2・3 に示す．

調査では特に，ボランティア参加者がまた来たい，来やすいと感じる受け入れ体制づくりや活動の継続とその際の PR，行政との協働が重要であることが明らかとなったほか，能代市で展開していくための課題が 2 点挙げられた．①市民のごみナビボランティアへの関心度をいかにあげるか，②初対面のボランティアの気持ちをどうつなげるか　また，能代市で継続的に実施していくためには，①既存団体を通し

て存在や活動 PR, ②ゴミ分別や環境への関心を喚起するとりくみ，③コミュニケーションの訓練・連帯する気持ち　の重要性が挙げられた．

表２　*伊勢市でのごみナビ調査の内容*

【きれい花火ボランティア調査項目】
能代市での実施に向けて，効果や問題点・課題を見つけよう！

○主催者（伊勢市）に対して
・ボランティアと毎年同じイベントで協働することのメリット・デメリット
・現状抱える問題点と今後必要な改善点
・市民や庁内の変化
・ハボネットに関わる予算とその内容
・その他

○ボランティア参加者に対して
・参加理由
・参加しての感想
・これまでのボランティア活動経験
・今後の希望
・その他

○ハボネットメンバーに対して
・これまでの活動を通して市民や主催者側の変化
・活動継続のためのポイント・問題点
・今後必要と考えられる改善点
・県内外の団体との連携について
・呼称使用の承諾
・その他

○花火参加者に対して
・ゴミナビ活動に対する感想
・その他

○ゴミナビステーション
・活動に必要なもの（小物）は何か
・ステーションのサイズと設備は何か
・どのような人員配置が必要か
・どのようなタイムスケジュールが必要か
・その他

○ボランティアセンター
・活動に必要なもの（小物）は何か
・どんな設備が必要か
・どのような人員配置が必要か
・どのようなタイムスケジュールが必要か
・その他

○その他気づいたこと・感想

表３　*伊勢市でのごみナビ調査結果*

ボランティア	・リピーターが 60% ・年齢層が広い ・情報源はインターネットや市広報 感想：達成感・楽しい・好きでやっている
５年間の活動による変化	・声かけをせずとも分別が行われる ・花火大会終了後のゴミの散乱が激減 ・市民が分別を理解してきている ・ボランティアが市民からお礼を言われる

同年 8 月には能代市循環型社会形成市民懇談会委員の有志 6 人と能代市環境企画課職員 1 人からなる「あきたごみナビ実行委員会（以下，実行委員会）」を立ちあげ，筆者も有志の一人として参加した．当時は実行委員会を開く適当な場所もなかったため，研究所の会議室を提供したほか，伊勢市での現地調査で把握できなかったハボネットのごみナビ情報の提供，資機材の準備や広報・スケジューリングなど活動全般にわたるアドバイス，協力依頼のための企業訪問等を行った．花火大会よりも小規模のイベント「エコタウンフェスタ」での試行に向けて準備を進め，10 月には三重県外では初めてのごみナビを行った（写真 2）．三重県ではエコステーションの設置や集まったごみの処理，ボランティアの募集はイベント主催者（伊勢市）が，ボランティア活動に関すること（事前説明会の開催やマニュアル作成，ボランティア本部の設置と運営，資機材の準備）はハボネットが行うという明確な役割分担ができていたため，能代市においても同様の分担とした．初めてにも関わらずボランティアは2日間でのべ53人にのぼり，市内 3 校の高校生 20 人の参加もあった．翌年以降の活動の参考とするために行ったボランティアへのアンケート結果（図 2）や実現可能性，ごみナビの効果が期待できる状況であるかどうか（写真 3）などを検討し，次年度は能代港まつり花火大会で試行することとなった．

写真２　能代市で初めてのごみナビ．

写真３　表示はあるものの分別できていない花火大会のごみの状況．

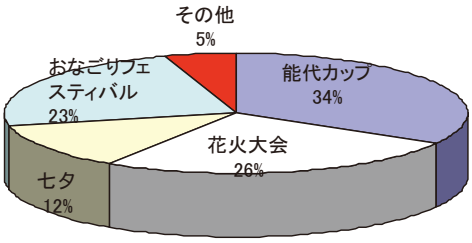


図２　ボランティアへのアンケート調査結果：ごみナビができそうな能代のイベント．

2007 年 4 月，活動を発展・継続していくためには官民協働の意識を高めることや信頼される組織であることが重要と考え，市長や学識者等 4 人に顧問を依頼し，代表・副代表を決定した．さらに，災害時にはボランティア対応をする社会福祉協議会職員や市内の公園のトイレ清掃を行っている団体代表等を加え，実行委員は 13 人となった．花火大会の主催者である能代商工会議所は会場運営にボランティアを募集していたが，ごみナビの取り組みは主催者にも

市民にも認知されていなかったため，ごみナビボランティアは実行委員会で募集を行った．

ユニフォームやトランシーバーなどボランティア活動に関わる機材はこの年も秋田県のボランティア・市民活動支援助成金を得て購入した．ボランティアマニュアルは，ハボネットのものを能代の現状に合わせて変更した．3 ヶ月の準備期間を経て，7 月に 2 箇所のエコステーションでごみナビを行った．活動のようすを写真 4 に示す．

写真 4　ハボネットと同じく赤のユニフォームを着用．活動開始前の全体ミーティング（左），ごみナビのようす（右）．

ごみナビの実施

能代港まつり花火大会でのごみナビ．

2008 年の花火大会では会場内の有料・無料席を網羅する 5 箇所にエコステーションを設置したほか，ボランティア本部も設置し，初めての本格的な展開となった．花火大会開始時間までは市長を交えて来場者への PR 活動や会場内の広報車による PR を実施した（写真 5）．念入りな準備の成果もあって混乱なく終えることができ，ボランティア参加者からは楽しかった，次回以降も参加したいとの声が多く，今後の活動につながる成果を得ることができた．また，市民やイベント主催者等のごみナビに対する理解や認知も得ることができた．

10 月にはハボネットとごみナビに関する知識や情報を実行委員会以外の市民とも共有することを目的に，県の活動助成金を得て，ハボネット代表の山本康之氏を講師に招いて勉強会を開催した．

能代港まつりでのごみナビ．

能代港まつり花火大会主催者がごみの持ち帰りを

写真 5　2008 年の活動のようす．

実施するため，会場内にごみ箱を設置しない方針を示したことから，2010 年からは能代港まつりでのごみナビを行っている．花火大会に比べて来場者が少ないことからエコステーションは 3 箇所しか設置していないが，休日の日中のイベントで，ご当地ヒーローの登場や子どものダンス披露など親子の来場者が多いこと，主催者である商工会青年部が会場内で発生するごみへの関心が高いことから，ごみの分別よびかけや啓蒙活動には適した場となっている（写真 6）．

写真 6　能代港祭りの会場のようす．

活動のきっかけは三重県では地域振興イベント，能代市では環境のまちづくりの啓蒙活動と異なるものの，ごみの分別をナビゲーションするというイベント支援活動は能代市においても根付いてきており，散乱ごみの減少や来場者への認知は回を重ねるごとに高まっている．これまでの活動概要を表 4 に示す．

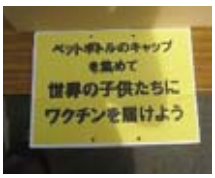
試行当初はハボネットのやり方をそのまま踏襲していたが，少人数で組み立て可能なエコステーションや会場内での PR 活動，他のボランティア団体の活動につながるペットボトルのキャップ回収など，能代独自の取り組みも増えてきている（表 5）．これらは毎年秋に開催する振り返りのワークショップと 1 年の活動を報告書にまとめることによって積み重ねられてきたものであり，任意のボランティア団体であっても記録を残し，経験知を共有知としていく

ことが重要と考えられる．

表４　*ごみナビの実施状況*

	エコタウン・フェスタ	花火大会		
活動日	06 年 10/21-22	07 年 7/21	08 年 7/19	09 年 7/18
人数	53（のべ）	55	56	64
募集先	環境活動団体	一般募集		
エコステーション数	1	2	5	5
	港まつり			
活動日	10 年 7/18	11 年 7/17	12 年 7/15	13 年 7/14
人数	42	36	25	26
募集先	一般募集			
エコステーション数	3			

表５　*ごみナビ実行委員会独自の工夫*

会場内の PR		
資源の有効活用		
組み立て式エコステーション		

ごみナビ展開時の留意点

この指とまれ！方式

これまでの秋田県内における筆者の経験では，行政等が市民参加の新たな取り組みを始めようとする場合には，事業に関連する幾つかの既存組織から地域性や参加者の属性等を考慮してある程度の人数を選出，組織づくりをしているように思われる．この方法による組織名簿は見栄えは良いが，参加者の関心度ではなく行政等からの「お願い」で成り立っていることから，取り組みを続けるためには継続的な担当者の熱意と予算措置が必須となる．

一方，市民へのごみ分別・リサイクルの啓蒙活動や，いつ起こるかわからない災害に対応可能なボランティアを育成するためには，市の担当者が替わっても，あるいは能代市循環型社会形成市民懇談会が解散となっても活動を続けられることが重要であるが，同懇談会は上記のように，参加委員全てがハボネットへの関心や能代でのごみナビ展開に意欲を示したわけではなかった．そこで，意欲ある数人で進める方が活動効果は高いと考え,「ごみナビをやってみたい！」と思う委員を募って取り組んできた．短期間で現地調査やエコタウンフェスタでの試行を行うことができたのも，翌年の花火大会も成功裏に終わらせることができたのも，家庭用コンポストの見直しと普及や自主防災組織の立ち上げ等を地域で行ってきた数人の意欲ある市民の行動力によるものであった．このときの有志が現在の実行委員会のコアメンバーとなっている．個人の自由な意思で参加するボランティアに限らず，フットワークの良さや活動のスピードが問われる半公的な要素を持つまちづくり活動においても，興味や意欲ある有志が集うこの方法は有効と考えられる．

官民協働と役割分担

能代市は環境のまちづくりを謳っており，環境基本計画には市民，企業，能代市の果たす役割が述べられている．こうした行政の方針と市民の活動をうまく合致させ，信頼できる相手として win-win の関係を築くことが重要となる．秋田ごみナビ実行委員会は能代市主催の会議の中から生まれた有志の会であることや，その中に市担当者も入っていたことから，能代市環境企画課（現在は環境衛生課）が事務局となっている．4 月から 10 月頃までに 4～5 回開く実行委員会の会議用資料は当初は筆者が作成していたが，協議・検討する内容や時期は毎年ほぼ同じであるため，3 年目以降からは事務局が行っている．

事務局と市民実行委員の主な分担を表 6 に示す．実行委員会に独自予算はなく，会費も徴収していないため，印刷や郵送料を市が負担していることは各委員の負担軽減と実行委員会の安定的継続に大いに寄与している．一方，能代市にとっては限られた職員数でボランティア対応をすることも，多くの市民に対してごみナビのような効果的な事業を実施することも難しいことから，双方が得意なこと，できる

ことを分担しているといえる．イベント会場内では官民の区別なく，本部担当やエコステーションのリーダーなど実行委員会で決めた人員配置に従って各々が活動している．

表６　*実行委員会内の役割分担*

能代市環境衛生課	市民実行委員
・実行委員会の会議資料作成 ・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ募集チラシ・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱﾏﾆｭｱﾙ印刷 ・応募ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱへﾏﾆｭｱﾙ郵送 ・エコステーション及びごみ収集に関わる資材用意 ・ホームページや市広報へ情報掲載，マスコミ周知 ・礼状発送 ・アンケート集計	・イベント主催者との打ち合わせ ・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ募集チラシ配布 ・知人や所属団体へ参加呼びかけ ・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ説明会の開催 ・文房具及びﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動に関わる資機材用意 ・礼状文作成

公募型助成事業による活動資金の調達

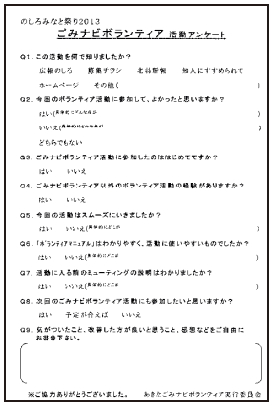
実行委員会は能代市と協働で独自の取り組みを行っている任意団体であるが，会費制をとっていない．その理由として，①ボランティア活動を長く続けていくためには，極力個人の金銭的負担はない方が良い，②金銭的負担がない方が若い人が参加しやすい，③まとまった金額を管理する会計は精神的負担が大きい，④金銭トラブルの未然防止，があげられる．また，港まつりの主催者である能代商工会青年部は，ボランティアの昼食と飲み物を提供してくれるため，ボランティアが負担するのはボランティア保険加入費と現地までの交通費のみとなっており，実行委員会は運営費が必要ない恵まれた状況にある．

しかしながら，当初は有志による伊勢市調査のための旅費やごみナビに必要な機材の購入費がなかったため，秋田県の助成金などを申請して賄った．

近年，行政からの支援が減る一方で NPO や市民団体への公募型助成事業は増えてきているが，そうした現状が県内で広く認識されているとは言い難い．また，採択された助成金を活用して成果を出せば，次回以降，申請先が異なっても実績として認められ，採択の確率はあがること，そのためにも地道な活動の積み重ねが重要であること，例え任意団体であっても市職員や大学の研究者等の公的立場の人間が参画している方が対外的な組織評価は上がることといった助成金獲得のために重要な基本的事柄も認知されていない．こうした現状を変えていくためには，地域活動に関わる行政職員や研究者等が目的に沿った助成事業を探して応募するという姿勢を見せ，そのノウハウを伝えていくことが重要と考えられる．

経験知から共有知へ

実行委員会では毎年，ごみナビ終了後の 9 月前後に活動の振り返りを行っている．そこでは，各人が当年の活動で評価できる点と改善が必要な点を準備段階・活動全般・マニュアル・準備品目などの項目ごとに書き出し，次年度はどのように対応するかを全員で協議している（写真 7）．また，2007 年の初回からボランティアへのアンケート調査も続け（図 3），その結果も見ながら意見交換を行っている．リピーターのボランティアも増え，概ね高評価であるため，特にネガティブな評価や自由記述欄には注意を払って状況の分析や改善案の検討を行っている．


のしろみなと祭02013
ごみナビボランティア 活動アンケート

Q1. この活動を何で知りましたか？
広報のしろ　募集チラシ　北斗新報　知人にすすめられて
ホームページ　その他（　　）

Q2. 今回のボランティア活動に参加して、よかったと思いますか？
はい（　　）
いいえ（　　）
どちらでもない

Q3. ごみナビボランティア活動に参加したのはなぜのためですか？
はい　いいえ

Q4. ごみナビボランティアは例のボランティア活動の経験がありますか？
はい　いいえ

Q5. 今回の活動はスムーズにいきましたか？
はい　いいえ（　　）

Q6. 「ボランティアマニュアル」はわかりやすく、活動に使いやすいものでしたか？
はい　いいえ（　　）

Q7. 活動に入る前のミューティングの説明はわかりましたか？
はい　いいえ（　　）

Q8. 次回のごみナビボランティア活動にも参加したいと思いますか？
はい　予定が合えば　いいえ

Q9. 気がついたこと、改善した方が良いと思うこと、感想などをご自由にお書き下さい。

※ご協力ありがとうございました。　あきたごみナビボランティア実行委員会

写真７　振り返りのようす．*図３*　アンケート用紙．

これら振り返り結果は実行委員会の議事録，活動状況写真，ボランティアマニュアル，アンケート結果，新聞報道記事等とともに活動報告書としてまとめ，実行委員に配布している．大変だった，楽しかった，ああすれば良かったといった個人の経験や感想はその場にいた数人とは共有できるが，そうでない他者に伝えることは難しい．時間経過と共に記憶は変容し，曖昧になっていくことから，参加者個々人の感想や経験を組織の記録として残すことが重要と考えられる．また，それを多くの人と共有，活用していくことで活動がより良いものとなり，継続の

原動力につながっていくと考えられる．前年の記録は，翌年の実行委員会で必要に応じて読み返され，今年度の変更・改善点を確認する際にも大いに役立っている．実行委員会の取り組みをより深く知ってもらおうと，イベント主催者や協力団体等にも配布している．当初 3 年間は筆者が執筆していたが，報告書の使い方や有用性が実行委員に理解され, また, 構成と記載すべき項目が毎年ほぼ同じであることから，以降は実行委員長と事務局で作成している．

地域力の向上

先に指摘した 4 点はいずれも活動団体の活性度や活動の質をあげるために重要であり，ごみナビに限らず他の地域活動においても考慮すべき点である．最終的に目指すのは，主体的で自立した団体による継続的な活動である．そうした団体の出現や多くの参加者を得ることで地域力は向上する．まちづくり活動においても，防災においても地域全体での参画が不可欠である．地域活動に関わる研究者はそうした視点を持ちながら，活動の様々なフェーズで必要な助言や提案・情報提供をし，共に考え，場合によっては自らが取り組む姿勢を積極的に示していくことが重要と考えている．

おわりに

三重県の災害ボランティアを視野に入れたハボネットのイベント支援のごみナビとそれにならって 2006 年に始めた能代市の秋田ごみナビ実行委員会の取り組みを紹介した．

ハボネットのごみナビは，兵庫県神戸市の人と防災未来センターで開催されている全国の防災担当の自治体職員を対象とした研修会でも紹介されているが，能代市以外での広がりを未だ見ない．その有用性は認識されたとしても，具体的な地域での防災の取り組みの一つにつながっていないと言える．

一方，能代市においては継続的にイベント支援を行って十分な成果をあげてはいるものの，県内での水害や東日本大震災被災地への支援ではハボネットのようにはつながっていない．実行委員の災害対応への関心がイベント時のごみの分別に比して希薄であることや，災害時の具体的な対応を想定していないことなどがその原因として考えられる．また，ハボネットのコアメンバーは 40～50 代の男性が多いのに対し, 実行委員会は 50～60 代の女性が中心であることや，日頃から災害対応組織との交流をもっているハボネットとは周辺環境が異なるため，同様の対応を行うことは難しいと考えられる．しかしながら，自身の地域での活動や子どもや親を通して地域で築いてきた人的ネットワークの豊富さはハボネットとは違った活動の可能性を持っており，災害の最前線に出なくても，多くの協力者に呼びかけながらこれまでの取り組みを生かした活動 - 例えば市町村等が募集する救援物資の分別ナビゲーションを受け付け現場で行う，ごみナビによる資源ごみの売り上げを被災地に寄付する - で被災地支援することも可能であろう．実行委員会では災害時に何ができるのか，どんなことをしてみたいのか，そのためには何が必要なのかを具体的に話し合い，次なる課題に取り組んでいきたい．

文献

神戸市広報課（2006）.「大震災から 10 年　神戸からありがとう」『市民のグラフ「こうべ」』震災 10 年特別号, 58.

ハローボランティア・ネットワークみえホームページ（2014）. http://www.hello-v.net/

ニューウ～ブ，あきたごみナビ実行委員会，秋田県立大学木材高度加工研究所（2006）,「三重県伊勢市におけるイベント支援ボランティア活動調査報告」.

みえ災害ボランティアセンターホームページ（2014）. http:mvsc.jp/

山口一史（2006）.「災害 NPO の市民資源性とは何か」『月刊きんもくせい』2006 年 6 月号 No.39.

渡辺千明・秦康範（2005）.「2004 年の台風災害における災害ボランティア活動」『日本建築学会大会（近畿）学術講演梗概集』F-1，775-776.

平成 25 年 11 月 30 日受付
平成 25 年 12 月 11 日受理

“Gomi Navi” Volunteer Activities for Event Support and Disaster Mitigation in Noshiro City, Akita Prefecture

Chiaki Watanabe[1]

[1] *Institute of Wood Technology, Akita Prefectural University*

The purpose of this paper is to explain about “Gomi-navi” volunteer activities, which is held in every July at Ise City in Mie Prefecture and Noshiro City in Akita Prefecture. This activity started in 1998 in Mie and 2006 in Akita for the purpose of event support and community planning for disaster mitigation. In the introductory chapter, I overviewed community activities at Kobe City after the Great Hanshin-Awaji earthquake, which aimed for disaster mitigation. The first and the second chapter explained the background of “Gomi-navi” volunteer activities in the two cities and specific content of in Noshiro City. Through a case study of event support volunteer activites, four important points for community planning in regional society are shown in the third chapter. Noshiro City, the effect of “Gomi-navi” volunteer activity brought a decrease in scattered garbage around the event site and improved the consciousness to the recycling of visitors, but how to connect volunteer activity in the normal with disaster volunteer activity is a future task.

Keywords: Gomi-navi volunteer activity, event support, community planning for disaster mitigation

Correspondence to: Chiaki Watanabe, Institute of Wood Technology, Akita Prefectural University, 11-1 Kaieizaka, Noshiro, Akita, Japan 016-0876. E-mail: chiaki@iwt.akita-pu.ac.jp